

中原4号墳の埋葬と儀礼



田村 隆太郎

中原4号墳の石室内では、埋葬された人体や布、木材は腐り、土の中でほとんど消失していました。しかし、若干の痕跡は認められています。また、ガラス製や土製の玉、多くの金属製品や土器が、後世の盗掘や攪乱が少ない状態で出土しています。そこで、発掘調査の詳細な記録をもとに、石室内で行われた埋葬とそれに伴う儀礼などについて復元してみました。

埋葬主体の復元 まず、埋葬主体（埋葬された被葬者）の配置を復元してみましょう。棺や人体はほとんど残っていませんでしたが、粉状になった骨や歯、装身具であったと判断できる玉類の分布、かたわらに置かれたであろう刀剣の配置から検討することができます。

検討の結果、石室の奥半部と前半部の両方に埋葬主体の存在が確認できます。さらに、奥半部では2体が頭を逆方向（逆頭位）にして、一部重複するように隣接していたと復元できます。副葬品の編年的位置から、頭を奥に向けた埋葬①は6世紀後葉の初葬（最初の埋葬）、頭を前に向けた埋葬②は6世紀末葉頃の追葬に位置づけることができます。

石室前半部の埋葬主体（埋葬③）については、頭位などの判断は難しいですが、石室内への出入りを邪魔する

場所にあり、散在する副葬品（鉄鎌や土器片）の上に埋葬主体の骨片があることから、奥半部の埋葬よりも新しい段階のものと考えられます。

副葬の様相 副葬品の多くは、埋葬①・②に伴うものと判断できます。それぞれの埋葬主体のかたわらには刀剣が置かれ、その他にも鉄鎌や馬具、農工具、土器などが多く副葬されています。詳細にみると、石室の奥半部と前半部とでは、副葬品の種類や土器の器種に違いがあることもわかります。

一方、新しい段階の埋葬③には副葬品がほとんどなく、埋葬①・②との埋葬方法や被葬者像の違いを推測することができます。

片づけと儀礼行為 石室の奥壁寄りでは、多くの鉄製品が集積された状態で出土していました。これらは埋葬①の副葬品であると判断でき、埋葬②に際して奥壁寄りに片づけられたものと考えられます。

さらに、ここには埋葬主体に伴う装身具とは異なる土玉が出土しており、儀礼的に土玉を用いた可能性を考えられます。また、歯の可能性がある小片が出土したという記録もあります。埋葬主体の場所に大きな乱れはありませんが、遺体の一部を移動した可能性は考えられます。

副葬品の破壊行為 石室の前半部では、鉄鎌や土器などが大きく破壊され、周囲に敷き寄せられた状況を把握することができます。土器片の分布状況などをみると、埋葬③の位置にあった副葬品が対象になっていることがわかります。したがって、埋葬③に伴う片づけであった

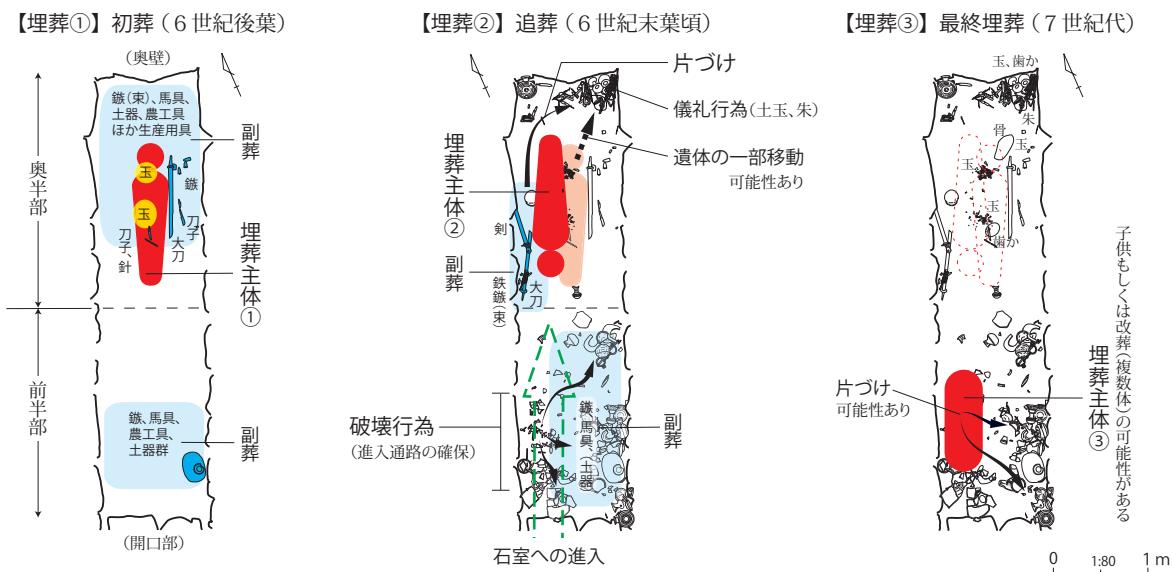


図1 中原4号墳の埋葬等の復元

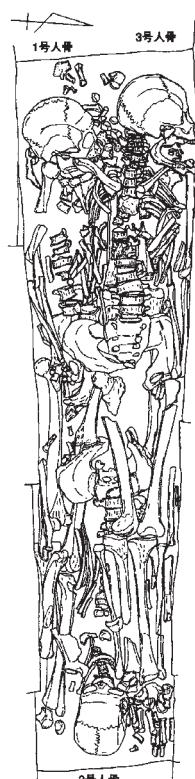


可能性も考えられます。

しかし、鉄鏃や土器片が広く散在する状態は、雑に破壊したりかき分けたりした行動がうかがえ、石室奥壁寄りの周到に集積した片づけとは大きく異なります。この違いを評価するならば、追葬に伴う片づけではなく、石室奥へ進入する際の破壊行為であった可能性も指摘でき、その必要は埋葬②の段階に生じたと考えられます。

埋葬方法からみた被葬者像 中原4号墳の被葬者は3人以上になりますが、埋葬①の被葬者が古墳築造のきっかけとなった人物です。そして、横穴式石室を採用して多くの土器を持ち込んだ埋葬は、この地域ではそれまでなかった埋葬方法であったと評価できます。

さらに、20年程後に追葬される埋葬②の人物は、埋葬①と近い関係にあったと推測されますが、重複するように隣接させた配置が特徴的です。横穴式石室では、ある程度の空間の中に追葬することは珍しいことではありません。しかし、九州地方北部や近畿地方西部などでは、古墳時代前・中期において、石棺の狭い空間に追葬する同棺埋葬があったことが確認されています。その中には、



兵庫県坪井遺跡2号墳1号主体部
(兵庫県教育委員会 2003『カヤガ谷墳墓群 大谷墳墓群 坪井遺跡』)

図2 同棺埋葬の例

埋葬①と埋葬②のよう頭位を逆にするものもあります。中原4号墳の埋葬①と埋葬②には、こうした遠地の埋葬習俗が横穴式石室の出現と伝播、導入を経ながら持ち込まれている可能性も考えられます。

なお、遺体の一部を移動した可能性についても、同様に石棺や横穴式石室において確認されています。この行為の背景には、先葬者に対する高い社会的評価と畏敬があったものと推測できます。

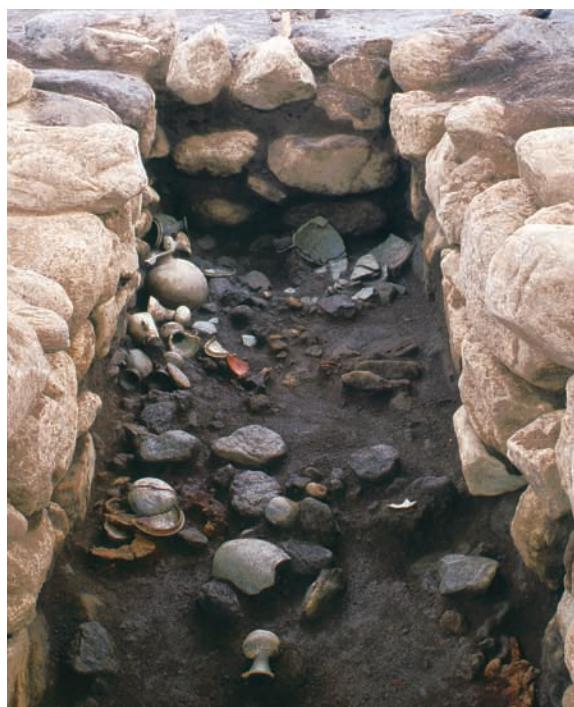


図3 石室前半部の遺物出土状況（奥側から撮影）

土器群からみた儀礼の特徴 土器の副葬は、横穴式石室の普及とともに多く認められるようになりますが、駿河東部ではその導入初期にあたる中原4号墳において、すでに多くの土器が副葬されていました(和田報告参照)。

埋葬主体に近い石室奥半部には、壺などが各所に置かれています。それに対して、埋葬主体から離れた前半部では、壺や甕(胴部に小孔のある壺形土器)、瓶類などの土器群を把握することができ、多くの飲食器を用いた葬送儀礼の様子がうかがえます。その土器群を他の古墳と比べると、

- ① 豊富な器種組成(壺類、壺瓶類、甕など)
- ② 脚付器種(器台、脚付壺、高壺)の欠如
- ③ 甕を多く含む

という特徴をあげることができます。①からは有力者に対する儀礼の様子がうかがえますが、②は最上位の首長に比べて階層的に劣る評価になります。③の特徴は特異的であり、類例をみても階層秩序との関係では説明できません。甕は古墳時代中期の須恵器出現以降、古墳の儀礼の土器群では1~数個は含まれる特徴的な器種でもあります。新来の埋葬施設と埋葬習俗を持ち込んだ特異な被葬者の葬送に対して、また、新たな群集墳への契機として、その特異性や新興性を象徴するように甕を多用する儀礼を志向したのではないでしょうか。

※参考文献等は『伝法 中原古墳群』筆者考察を参照。

